広島大学附属中・高等学校中等教育研究紀要
〈第65号　2018〉

読書実態から考える読書教育の実践

三　根　直　美

本稿では，全国実施の「学校読書調査」と勤務校での中学一年生対象の「読書実態に関するアンケート」の結果，学校図書館の貸出状況を踏まえ，その問題点として①自分の好きな傾向の本しか読まない。②軽い内容の娯楽的なものしか読まない。③不読者＝貸出数0の割合が全国平均より高い。④個の読書で，独りよがりの読み方，外に広がる読書ではないの４つを挙げた。読書教育の必要性を学習指導要領や行政の取り組みから確認した後，４つの問題点解決のために読書教育の実践とその効果を紹介した。

１　はじめに

詩人長田弘は次のように言う。

今日，揺らいでいるのは，本のあり方なのではありません。揺らいでいるのは，本というものに対する私たちの考え方であり，「本という考え方」が揺らぐとき，揺らぐのは，人と人を結び，時代と時代を結ぶものとしての，言葉のちからです。[注1]

これだけインターネットが前提となったSNS環境が発達した今，電子書籍も多く出て，紙の本はなくなるのではないかと言われている。映像化されるものも多く，文字のみで鑑賞する本の形態はもはや古いと言われる時代に突入している。しかし，現在そのような**「本のあり方」**なのではなく，**「本というものに対する私たちの考え方」**が揺らいでいるのは確かである。

勤務校では本が好きという生徒は多いが，その内実はどうなのか。**「言葉のちから」**を扱う国語科での読書教育はどんな効果をあげられるのか，その可能性を考えてみたい。

２　生徒の読書実態について

(1) 第64回「学校読書調査」から

毎年，全国学校図書館協議会と毎日新聞社が共同で実施している，全国の小・中・高校生の読書状況を調査したものが，「学校読書調査」である。2018年５月１か月間の平均読書冊数は，中学生（2714人）４，３冊，高校生（2976人）は１，３冊である。

また，不読者（５月１か月間に読んだ本が０冊の生徒）の割合は，中学生は15.3％，高校生は55.8％となっている。

これらの数値は，中学生においてはここ数年横ばい状況で，ほとんど変化はないが，高校生は読書冊数は減少，不読者の割合は若干増加している。

高校生の不読者の多さは深刻な問題と受け取られているが，中学生では「朝の読書」を導入した学校が増えているため，15年ぐらい前より不読者の割合は激減し，2006年あたりから横ばい状態である。

最近の生徒は本を読まないということがよく言われるが，数値的にはそこまでの問題性は感じられない。しかし，その中身，読書の質についてはこの調査では測る指針とはなりにくい。

(2) 勤務校の中学１年生へのアンケートから

勤務校である広島大学附属中学校の１年生121名（３クラス　A　41名　B　40名　C　40名）に対し，2018年４月「読書実態に関するアンケート」を実施した。

質問項目は，

①「本を読むことは好きですか。」②「１か月に本をどれくらい読みますか。」③「オ（０冊）と答えた人に聞きます。なぜ読まないのか，その理由を選んでください。」④「どこで本を手に入れますか。」⑤「読む本の種類で多いのはどれですか。」⑥「読書の良さや大切さは何だと思いますか。」⑦「マンガは読みますか。」⑧「新聞を読みますか。」

の８項目である。

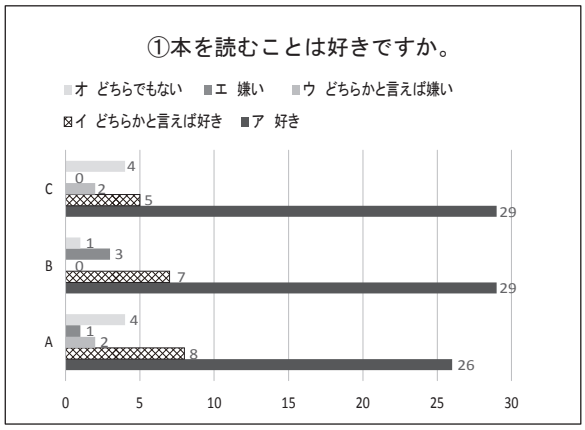
①本を読むことは好きかという質問に対し，

ア　好き　イ　どちらかと言えば好き　ウ　どちらかと言えば嫌い　エ　嫌い　オ　どちらでもない

の選択肢を用意した。

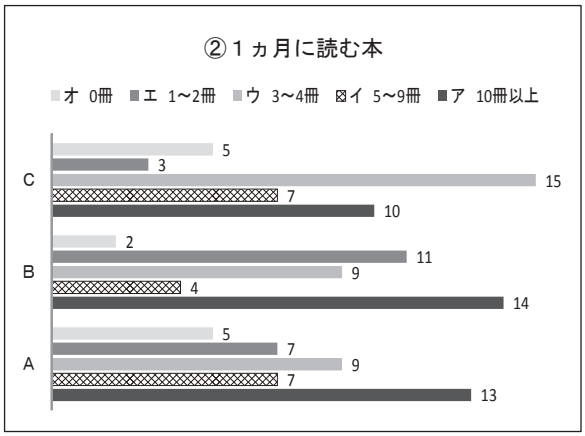
A　63.4％　B・Cともに70.3％が本を読むことが好きだと答えている。嫌い，どちらかといえば嫌い

な生徒は，A・B　7.5%　C　5%と低い割合である。



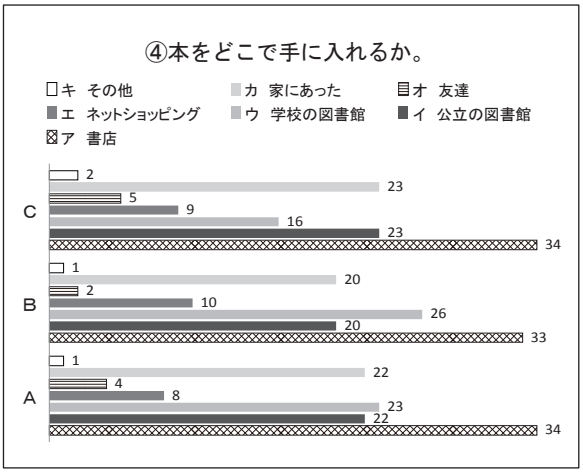
②の１ヵ月に読む本の冊数は，ア　10冊以上　イ　5～9冊　ウ　3～4冊　エ　1～2冊　オ　0冊の選択肢のうち，全国平均の４，３冊以上に該当するア，イ，ウの選択者がA　70.7%　B　67.5%　C　80.0%に当たる。また，不読者の割合は，AとCが12.2%　Bは5%である。

不読者の理由は，ア　学校や塾などの活動が忙しくて読む時間がない　は４月の段階で，部活動なども始まっていない時期であったため少なく，イ　読みたい本がない　ウ　ゲームの方が面白い　エ　テレビの方が面白い　オ　マンガの方が面白い　カ　面倒くさい　が理由として挙がっていた。



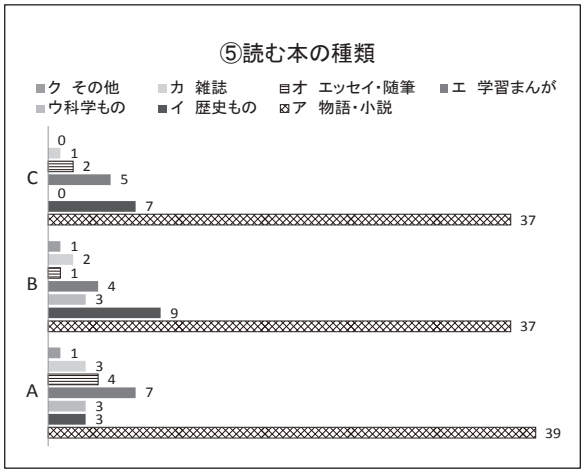
④「どこで本を手に入れますか。」という質問に対しては，ア　書店　がほとんどで，イ　公立の図書館，ウ　学校の図書館，カ　家にあった（親や兄弟の本）が半数で同じ程度であった。注目は，「エ　ネットショッピング」で購入する生徒が，どのクラスも２割いたことである。親がネットで様々なものを購入している世代であるからと予想される。書店に行って買うよりも，ネットで手早く購入する時代となっているのだろうか。

また，「オ　友達」に借りるという生徒が少なかったことは意外であった。同じ傾向の本を読まない，本を貸し借りする習慣がないという原因が予想される。また，最近はCD，DVD，漫画などのレンタルショップも数多くあることから，友人間の貸し借りという文化は過去のことであるかもしれない。
とすると，同じ本を読んでその感想を語り合う経験などはあまりないと予想される。



⑤「読む本の種類で多いのはどれですか。」という質問には，ABCとも同じ傾向を示し，ア　物語・小説がほとんどで，イ　歴史もの　ウ　科学もの　エ　学習マンガ　オ　エッセイ・随筆　カ　雑誌　とも低い値であった。

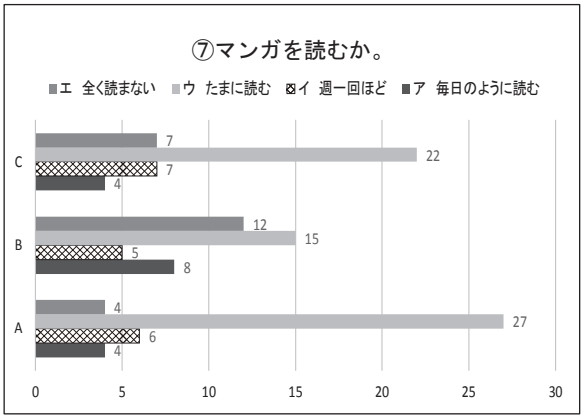
学習マンガのみ，科学もののみとした生徒が各クラス１名おり，偏りがある。ジャンルを幅広く読んでいる生徒は，各クラス４人程度で，後はどれか一つに固定していた。



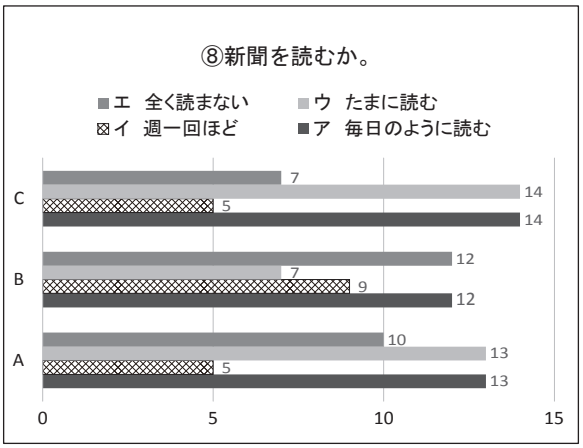
マンガを読むことが読書をするのを妨げているのではないかという推測で，⑦「マンガは読みますか」の質問を考えた。

ABCとも山は同じで，ウ　たまに読む層が圧倒的に多い。ア　毎日のように読む　イ　週１回ほどという生徒は，５名前後，エ　全く読まない生徒はBだけが多く，30%を占めている。それほどマンガ

が読書を妨げる結果とはなっていないようだ。



では，新聞はどうであろうか。最近は新聞を購読していない家庭も増えてきている。勤務校では，10年以上前から「新聞記事を読もう」というタイトルで，新聞記事を隔週で選び，切り取って貼り付けた上で，要約，言葉調べ，漢字の練習，感想を書かせる課題を中学3年間課している。⑧「新聞を読みますか」という質問に対し，ア　毎日のように読む生徒も30％は存在するのに，ウ　たまに読む生徒がABともに30％である。Bのみ，たまに読む生徒も少なく，さらにエ　全く読まない生徒が30％を占める。新聞を読むことで，社会的事象への関心や知識が広がっていくはずなので，読書だけでなく，新聞を読むことと読む力の関係も今後見ていきたい。



同じ「読書実態に関するアンケート」を2019年３月に実施予定である。読書実態の個人的変化を見る予定である。

(3) 学校図書館の貸出実態から

勤務校の学校図書館は，50,000冊以上の蔵書を持ち，専属の学校司書も常駐しており，1999年からは電算化されている恵まれた環境にある。中・高合同のものとなっており，2018年には内部が改装され，一層快適な環境になった。ただ，そのために2018年６月４日～９月４日までは休館であったため，貸し出しや図書室での活動は出来なかった。

学校司書の協力で，４月～12月の中１における貸し出し状況をまとめていただいた。貸出０冊の生徒は，A　10名（24.4％）　B　12名（30％）　C　15名（37.5％）と「読書実態に関するアンケート」とは違う傾向が見られた。公立の図書館，学校の図書館で借りると答えた生徒は，半数強いたが，習慣づいている生徒は学校で特に借りることを促したり，調べ学習で本を使ったりしなくても，自主的に借りる。しかし問題は，図書館に借りに行ったことがないという生徒の存在である。結局本を読む生徒と全く読まない生徒との二極化があることを示している。

また，利用者の貸出回数を見ると，一学期間（4～6/1）で10冊以上借りている生徒は，A　5名　B　8名　C　3名　二学期間（9/5～12/21）では，A　8名　B　7名　C　0名となっている。よく借りている生徒は同じ生徒が殆どである。貸出総数は，A　595冊　B　520冊　C　138冊とクラスによってかなり偏りがある。

さらに，好んで読まれている本の種類であるが，手塚治虫マンガ全集，講談社漫画文庫，学習まんがなどの漫画系，YA! ENTERTAINMENT，電撃文庫，集英社オレンジ文庫，メディアワークス文庫，角川ビーンズ文庫，角川スニーカー文庫，講談社ノベルズ，長編推理小説　光文社文庫，ノベルズ・エクスプレスなど，いわゆる表紙がアニメ調で，内容も推理小説など「ライトノベル」が三分の二を占めている。また，映像化されたものの小説版（万引き家族，君の名は，言の葉の庭，ちはやふる，セーラー服と機関銃など）や，ケータイ小説の文庫本も見られた。

あとの三分の一が，理系の定番である空想科学読本や，児童文学からの流れを組む上橋菜穂子，森絵都，あさのあつこ，朽木祥，推理物の定番赤川次郎，現代の大人によく読まれている草野たき，小川洋子，重松清，伊坂幸太郎，恩田陸，星新一，東野圭吾，百田尚樹などである。

本の内容として刺激的な展開が入っていたり，推理的要素が入っているものが，生徒にとっては面白いと感じられるのであろう。日本文学・世界文学の名作と言われるものは，「二十四の瞳」（壺井栄）「羅生門」（芥川龍之介）「黒い雨」（井伏鱒二）「車輪の下」（ヘッセ）「しろばんば」（井上靖）「罪と罰」（ドストエフスキー）「人形の家」（イプセン）の７冊（貸出総数1,253冊中）だけであった。既に，こういうものは生徒にとっては古典であり，読むことにかなり

抵抗を感じるもののようである。

楽しむための読書はできていると思われるが，幅広い読書となっているかという点については，疑問である。

「読書実態に関するアンケート」は自己申告であるので，その実態はかなり誤差が多いものであると考えられる。1か月何冊ぐらい読むかと問われても，多い時もあれば少ない時もあり，だいたいの目安でしかない。それと比べて，学校図書館の貸出は，純粋に借りている本や冊数がデータとして残っているので，実態を把握する上で信憑性はある。

学校図書館以外の，家庭での読書歴もわかるとよいだろう。学校図書館を利用しない生徒は，公共の図書館も利用しないだろうし，家でだけ多く読むということはあまり考えられない。

(4) 中学生の読書実態における問題点

実態調査などから，考えられる問題点は以下の通りである。

① 自分の好きな傾向の本しか読まない。読書の範囲が狭い。
② 軽い内容の娯楽的なものしか読まない。読めなくなっている。
③ 不読者＝貸出が0の割合が全国平均より高い。
④ 個の読書となっており，独りよがりの読み方になり，外に広がりを持つ読書ではない。

①について，同じ傾向の本だけに接していると，使用される語彙もほとんど変化はないし，文章にしても同じものにしか触れない。**「多様なジャンルの本を幅広く読んでいる子どもほど『読解力』が高い」**傾向があることが，ベネッセ教育総合研究所の調査から明らかになっている。[注2] 幅広い読書が成立する条件として，**「子どもの側に幅広い興味が成立していること」「発達段階を考慮しつつも，やはり多様なジャンルの本を子どもの興味の当座の有無に拘わらず課題として読ませていくこと」**が提案されている。

②は，楽しむために読むだけで，読みながら考える，反論する，批判する，問題提起するなどの行為がないと，言葉が鍛えられない。

③は，家庭で本や新聞を読むことを体現しないと，子供も読むようにはならない。課題が出ればそのためだけに辛うじて読書はするが，後の人生でも読み続けることはまずないだろう。

④について，個人で読んだだけだと個人内部で読みが収まったままで，いつまでたってもいくら読んでも，読解力の向上には繋がらないのではないか。

前述のベネッセ教育総合研究所の調査で，**「適切な読み方や読んだ内容の活用の指導が『読解力』を高める」**ということが明らかにされている。[注3] 読み方自体を取り立てて指導したり，読んだ内容の活用の仕方を学んでいくことがないと，読解力には繋がっていかない。

『感情化する社会』の著者である大塚英志は，**「現代は感情が価値の最上位にきて共感が社会を動かしている。そこでは言語による丁寧な対話が回避されてしまう。それが『感情化』です。」**と言う。**「言語による合意形成をスルーし，感情で一体化する社会のリスクは歴史が証明してい」**るとし，その解決法を**「近代をやり直せばいい。そのために考える材料は，かつて近代をつくるための多様な試行錯誤の足跡として，『感情』ではない文学や思想が」**いくらでもあると指摘している。[注4]

文字で書かれた文学，思想を面倒だと思わずにじっくりと読むことが，情報過多の時代に生きる現代人にとっては特に必要なのである。適切で継続的な読書教育が求められている。

3　読書教育の必要性とその取り組み

(1) 学習指導要領・行政での取り組みから

新中学校学習指導要領に当たっては，

第１章　総則　第４　指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

2 (11) 学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り，生徒の主体的，意欲的な学習活動や読書活動を充実すること。

第２章　各教科

第１節　国語　第3　指導計画の作成と内容の取り扱い

1 (2) 第２の各学年の内容の「Ａ話すこと・聞くこと」，「Ｂ書くこと」，「Ｃ読むこと」及び［伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項］について相互に密接な関連を図り，効果的に指導すること。その際，<u>学校図書館などを計画的に利用しその機能の活用を図るようにすること</u>。また，生徒が情報機器を活用する機会を設けるなどして，指導の効果を高めるよう工夫すること。

(5) 第２の各学年の内容の「Ｃ読むこと」に関する指導については，<u>様々な文章を読んで，自分の表現に役立てられるようにすること</u>。

（下線部　筆者による）

「目標（3)」
中１　読書を通してものの見方や考え方を広げようとする態度を育てる。
中２　読書を生活に役立てようとする態度を育てる。
中３　読書を通して自己を向上させようとする態度を育てる。
とある。

学校図書館を国語科だけでなく，他教科でも計画的に利用することを促している。また，調べ学習などにも活用することを明示し，楽しむ読書と学習の助けとなる読書を促している。多くの種類の文章に触れ，表現に結びつく指導が必要とされている。

また広島県教育委員会では，平成16年公共図書館の貸出冊数が全国平均4.8冊であった時に，4.1冊，一番多い県では8.9冊とかなり開きがあったことを踏まえ，平成17年度に「元気挑戦プラン」という５年間の総合計画が策定された。平成26年２月には，「広島県子供の読書活動推進計画」（第三次）が策定されている。

2015年（平成27年）３月朝の読書推進協議会調べ[注5]によると，広島県では，小学校では394校［前473校］中学校では216校［全236校　2019年（平成31年）１月７日付］，高等学校では92校実施されている。アンケート調査なので，回答していない学校は含まれていないが，小学校では84.8％，中学校では85.5％で実施されていることになる。

小学校での朝の読書の実施率の高さから考えると，広島大学附属中学校一年の生徒達も，小学校で経験してきた生徒は多いと予想される。ただ多くの小学校から入学してくるので，その実態には違いがあると予想される。

(2) 国語科授業における取り組み

A　中学校教科書から

学習指導要領に明示されていることから，教科でも単元として，読書活動が明確に計画されている。三省堂では，資料編で読書ガイダンスとしてお薦めの本を挙げている他，読書活動として
中１　「読書郵便」を楽しもう
中２　一本の帯・ポップづくり
が組まれている。

三省堂では画期的な試みとして，平成17年検定済教科書には，トーベ・ヤンソン「猫」を読んで実施するブッククラブの取り組みが提案されていた。現在の2015（平成27）年３月６日文部科学省検定済教科書ではなくなっている。

学校図書では，巻末の読書案内に加えて，
中１　私のブックデザイン
が組まれている。ブックカバーの作成が提示されており，キャッチコピーやサブコピー，ボディコピーや本の紹介などを選んで書くものである。

光村図書では，
中１　「私が選んだこの一冊」というテーマで，ポップ，紹介箱，スピーチのどれかを選択する。
中２　「二年一組のおすすめの三十五冊」と題し，一年生に向けた読書案内を作る。
中３　「未来の私にお薦めの本」を読み，自分の読書生活を振り返り，今までの読書傾向を分析する。これから読んでみたい本をノートに書き出す。

「読書記録をつける」を読み，読書を記録することを考える。

東京書籍は，
中１　読書カードを作ろう，「集まって住む」を読んで，本紹介のポスターを作ろう。
中２　本の広告カードを作ろう，「歴史の物差し－水月湖の年縞」を読んで，ミニ読書会を開こう
中３　ビブリオバトルをしよう，読書生活を振り返ろう

他の教科書との違いが顕著なのは光村図書，東京書籍であるが，各学年で必ず１～２の読書活動が組まれている。その内容は，誰に対して何を伝えるのか，相手意識を明確に持たせた取り組み，他者との意見交流がなされるように工夫されている。また，大村はまの読書生活指導の流れを受けてか，自分の読書生活の振り返り，分析，今後の目標を立てさせる試みも組み入れられている。

現在の読書生活者を育成するには，中学校から高等学校へ繋げていく，継続的な取り組みがなされないことには実現するはずはない。本を読みなさいと進めても，必然性を感じなければ読まないし，何かきっかけがないとその面白さを感ずることもない。

教科書で読書活動として取り立てて組まれていることを実施していくことにより，読書への興味・関心を引くことへとつながっていくだろう。

B　授業での取り込み

勤務校では，朝の読書は実施していない。

中３で実施する総合学習（後期10月～３月実施）の時間には，数年来「昔話を読む」[注6]というテーマで国語科が実践している。グループで選んだ「浦島太郎」に関わる疑問点を解決していく中で，情報を検索していく。インターネット検索は便利であるが，人の意見のコピペであったり，誰が書いているのかよくわからなかったりと，その中身は玉石混交である。そこで平成27年に情報館でのインターネット検

索は一切使わず，学校図書館のみで調べさせたところ，時間はかかっても辞書，事典からその原典に当たって行ったり，検索サービスから思いも寄らないジャンルのものまで出てきたりと，驚きの情報が発掘できていた。生徒の感想からも，

○普段ならインターネットで調べてすぐ終わるが，今回のように図書館に行って本で調べることで，様々な情報が入手できた。さらに本で調べてわからないことをまた調べるように，わからないものをわからないままにせず，調べたのでその結果さらに新しい発見や，わからない言葉などが出てきて，とても調べることが楽しかった。（傍線は筆者。以下同じ）

○インターネットにのっていないことも本などにたくさん含まれていて，本の偉大さを体感した。そして本で物事を調べるということは，今の私たち現代人にとって大切だと思った。僕は今まで本とあまりかかわってこなかったけど，これからは積極的に本を読むようにしていろんなことを知りたい。

○初めは「浦島太郎」というキーワードだけで探していたが，調べを進めていくうちに民話や宗教なども関連していると気づき，それらについても調べていくと思った以上に情報，資料が集まって最終的に浦島太郎の話の変化について，一つの結論に結び付いた。ただ，文献などの情報源を書き残しておらず，少し情報不足なところも見受けられた。

○最も印象に残ったのは井原西鶴「好色一代男」に「竜宮の乙姫」に関する一文があったことです。全然関連しないと思っていたのに衝撃を受けました。

とあり，本による情報収集という体験は多大な意味を持ったと考えられた。

通常の授業においては，月１回の学校図書室での読書の時間を設けている先生もおられる。その場合，必ず借りるので，必然的に本を手に取るようになる。

2018年度は奨励研究　平成30年課題番号18H00007「読書活動に結びつく国語科の学習のあり方と読みの力の向上との連関についての研究」に認定されたため，中１Ｂの教室に岩波ジュニア新書166冊，光文社古典新訳文庫69冊を常備した。文学作品はよく読むが，説明文はなかなか手に取らないこと，さらに幅広いジャンルについての文章がたくさん含まれていることを踏まえた。

実施した読書活動の内容は以下の表の通りである。春休みの課題は新入生全て，夏休みの課題は，全校生徒対象（中１～高２）である。後は，筆者が組み入れた取り組みである。

時期	学　習　内　容
春休み 入学前	お薦めの本リストより一冊読んで、800字の読書感想を書く。
一学期 ６月	ビブリオバトル　教室に常備している岩波新書から一冊を選ぶ。
夏休み	読書感想文（2000字）提出。
二学期 ９月	読書感想文を書いた本をはがき新聞　注７で紹介。教室掲示。コンクールへ出品。
二学期 11～12月	「岩波ジュニア新書・光文社　古典新訳文庫を読む」と題して、一冊選び、本紹介をする。
三学期 １～２月	教科書教材「トロッコ」（芥川龍之介）を読んで、ミニ読書会を実施する。読後感想文を書く。

振り返りシートによると，ビブリオバトルをして面白かった　28名，どちらかといえば面白かった11名，どちらかといえばつまらなかった　１名であった。

面白かった理由としては，本への関心が高まった，読まなかった本を他人のアピールで興味が持てた，自分の思っていない意見が出た，本の魅力を紹介するのもされるのも，本を読んでいるようで楽しかった，説明の仕方が上手で，お手本になったなど，刺激を多く受けたようだ。本を読んでみようというきっかけとなり得たと判断される。

「岩波ジュニア新書・光文社　古典新訳文庫を読む」試みでは，面白かった　９名，どちらかといえば面白かった　26名，どちらかといえばつまらなかった　３名，［あまりうまくできなかった。カンペを用意していなかった。緊張して上手く話せなかったし，言いたいことも上手く伝わらなかった。つまらなかったというか，残念だった。］つまらなかった　１名，［人前で話すことは好きではないし，もっと自分の気持ちや意志を整理した上で話したかった。悔いが残る。もっとできた。］という結果であった。結局つまらなかったという生徒の理由は，自分がうまく発表できなくて悔しいというものであったので，試みとしては殆どの生徒が興味・関心を持って取り組んだと言えよう。

本紹介は，生徒が書いた文章をそのまま印刷して配布し，質問メモを書き，該当者に渡し，それを踏まえて全員の前で発表する形式を取った。書いた文章をそのまま読むだけでは発表も面白くない。その場で質問するのは難しいと考え，この形式を取った。面白かった生徒の感想として，「同じ内容に聞こえる本も，多角的に見て取れる本であるから，自分の読んだ本について伝えられる楽しさと緊張があった

から。自分の考えや思いを伝えるために，何をどう言おうか考えるのが楽しかった。自分の発表，意見をみんなが聞いてくれて，受け止めてくれたから。」など，理由が挙がっていた。

個人で発表するという場は緊張を生むが，それが逆に真剣さに通じ，伝える中身の吟味となっていったので，本の紹介をする形式としてはかなり効果的な取り組みであった。

４　まとめとこれからの課題

今回の実践における具体的な効果は，まだ実証されていない。現在のところ，学期毎に単元として取り立てて読書活動を組み入れたり，読書環境として教室に本を200冊以上常備することを進めており，それらが読みの力の向上に結びついたかどうか，定期試験，外部模試などの得点との相関関係を探っている最中である。

また，年間に読書感想文を３回書くことになるが，生徒の気づきの深化や書く中身の変化を個別の生徒を対象にして探っていきたい。

さらに今回は学校司書の方にもデータ収集で協力していただいたが，筆者の個人的な研究に留まっている。中１～中３，高１～高３において，国語科全体での読書活動の系統化が必要である。シラバスの中にも共通して組み入れていくことがいるだろう。教員が推薦する本を挙げたり，１か月に一度は図書室の日を設けたりと，常日頃からの絶え間ない読書指導が必要である。

学校での読書活動をきっかけとして，少しでも中学生の読書における問題点が改善されていくことが喫緊に求められている。

注

1）長田弘，「読書からはじまる」，日本放送出版会，2001年，8.

2）ベネッセ教育総合研究所，『2010年「子供の教育を考える　第27回」データからみる今と未来』，2010年，http://berd.benesse.jp/berd/berd2010/center_report/data27_02.html（閲覧日2018年12月16日）

3）注２．同。

4）大塚英志，朝日新聞朝刊，「感情振動　ココロの行方1」，2019年1月1日

5）朝の読書推進協議会，「都道府県別朝の読書実施校数」，https：//www.mediapal.co.jp/asadoku/（閲覧日2019年1月13日）

6）三根直美，「単元　昔話を読む」，髙橋邦伯・渡辺春美編著，『シリーズ国語授業づくり　中学校古典　言語文化に親しむ』，東洋館出版社，2018年，112-118.

7）公益財団法人理想教育財団が提案しているはがきサイズより少し大きい新聞形式の原稿用紙を使用した。また，財団作成の透明のファイルに入れると，教室掲示が簡単にできる。